



平成24年11月3日
市内で行われた、ある交流会
そこには、震災で失われた
大切な思い出を復興し、
新たな絆を結んだ
人々のドラマがありました。

風船が つないだ絆

塩尻と陸前高田―
時を超えた交流の物語

始まりは一つの風船から

昭和61年11月。岩手県陸前高田市に住む吉田 富男さんは、出稼ぎ先の東京都内の宿舎で、破れた風船を拾いました。そこには、『この風船を拾った人はおたよりをください。長野県塩尻市立塩尻中学校1年1組川上 知夏』と書かれた小さな手紙が付いていました。中学校の文化祭で、全校生徒が飛ばした風船の一つが、東京で働く吉田さんのもとに届いたのです。早速、吉田さんは返事を書きます。『わたしは51歳の大工です。中学2年生の息子がいます。』数日後、吉田さんのもとに大きな荷物が届きます。中には、1年1組40人全員の写真とプロフィール、そして一人一人の手紙が入っていました。こうして、吉田さんと生徒たちの文通が始まります。

何か行事があるたびに届く生徒か

らの手紙を、吉田さんは何度も読み返し、一人一人に返事を書きました。時には、カセットテープに声を吹き込んだ「声のたより」や、家族の写真などを送り合うことも。いつしか文通は、家族のもとを離れ一人で働く吉田さんにとって、何よりの励みとなっていきました。

文化祭での対面、そして卒業

文通を始めてから2年、吉田さんに、担任の林 嘉久夫先生から一通の手紙が届きます。「生徒が一生懸命作り上げた、中学校生活最後の文化祭を見てあげてください。生徒全員が吉田さんを待っています」。吉田さんは、気持ちを抑えることができませんでした。一人一人へのお土産のシャープペンと、拾った風船を握りしめ、塩尻へ向かいました。

こうして、吉田さんは生徒たちと対面を果たします。「皆さんからの手紙は一生の宝です」。吉田さんの言葉に、割れんばかりの拍手が沸き起こります。生徒たちと過ごした2日間は、生涯忘れない思い出となりました。別れの日、いつまでも手を振る生徒たちの姿に、吉田さんの目には大粒の涙があふれていました。平成元年3月。40人の生徒たちが卒業を迎えたこの日、吉田さんと生徒たちが紡いだ2年4カ月、400通におよぶ文通は終わりました。

24年前、 一つの風船が結び付けた絆

未曾有の大災害を経て、
再びみんながつながった。

全てを奪い去った大津波

長い出稼ぎ生活を終えた吉田さんが家族との時間を過ごす陸前高田市は、三陸特有のリアス式海岸が美しい、自然豊かな漁師まちです。7万本の青松に囲まれた白砂の浜「高田松原」は、市民の誇りでした。

平成23年3月11日。最大17メートルの大津波が、このまちを襲いました。大津波警報と同時に庭に飛び出した吉田さんが見たものは、田畑を飲み込みながら押し寄せてくる黒い波。妻と孫を連れ、急いで近くの高台に避難した時、眼下には、この世のものとは思えない光景が広がっていました。「もうやめてくれ…」。家も、車も、思い出も、生まれ育ったふるさとが、築き上げてきた幸せが、一瞬にして流されていくのを、ただ見下ろすことしかできませんでした。この日、吉田さんは全てを失いました。寒空の下、避難してきた人々と身を寄せ合いながら、連絡が途絶えた家族への思いと、全てを失った絶望を抱え、眠れぬ夜を過ごしました。家族全員の無事が確認できたのは、津波の発生から10日以上経ってからでした。

思い出を吉田さんのもとへ

吉田さんは今、陸前高田市の仮設住宅に住んでいます。ここには、全国から多くのボランティアが集まり、

今も復興支援活動が行われています。昨年6月、支援活動の一環として、立教大学による流しそうめんが計画されました。その陣頭指揮をとっていたのが、松山 真教授です。活動の中で吉田さんと知り合った松山教授は、その人柄をこう振り返ります。

「吉田さんは、学生たちに無理はさせられないと、準備の1カ月間、ほぼ毎日、一人で黙々と流しそうめんの台などを作ってくださいました」

ある日、松山教授は、吉田さんから24年前の文通の思い出を聞きます。心を尽くして人と接する吉田さんの変わらぬ姿に深い感銘を受けた松山教授は、行動を起こします。吉田さんの記憶を頼りに、思い当たる先に連絡を入れ、ついに林先生にたどり着きます。「吉田さんに、もう一度思い出を届けたい。手紙でも、写真でも、あれば写しを取らせてほしい」。松山教授の言葉を聞いた林先生に、一抹の不安がよぎります。「24年前のこと。ましてや、県外にいる生徒も多い。果たして、当時の品が集まるだろうか…」。しかし、連絡を受けて集まった生徒たちの言葉は、その不安を打ち消すには十分でした。「やれるだけのことはやろう。そして、24年前と同じように吉田さんを塩尻に迎え、自分たちの手で思い出を届けよう」

吉田さんとの再会の日は、11月3日に決まりました。



24年ぶりの再会

「吉田さんに、みんなで思い出を届けよう」
 平成24年11月3日、市内のホテルに集まった
 かつての生徒たち
 24年の時を超え、再会を果たします。

会場に響いた校歌

会場にいる誰もがその言葉を聞き漏らすまいと見守る中、吉田さんから発せられた第一声は、意外なものでした。
 「ト信濃の国の中央に…」
 突然流れてくる塩尻中学校の校歌に、その場にいた誰もが、一瞬あぜんとします。
 「次、何だったっけ」。はにかむ吉田さんに、それまでの会場の空気が一変します。次の瞬間、その歌声に寄り添うように、口々に校歌を口ずさむ生徒たち。
 「あの時の中学生が、こんなにも立派になって。今夜は思い出を、大いに語り合いましょう」。吉田さんの笑顔と

ともに、元塩尻中学校3年1組による「吉田さんを囲む会」が幕を開けました。

交わす言葉によみがえる絆

「大震災があつたとき、風船のおじさん」のことを思い出し、無事を祈っていました。「わたしたちが経験した人の縁、絆の大切さを、子どもたちにも伝えていきます」。吉田さんとの再会の喜びと、復興への願いを込めた生徒たちの言葉。中には、24年間伝えられなかった仲間への思いや感謝の言葉を口にする生徒も。24年ぶりの再会は、生徒同士もまた同じでした。中学を卒業して以来止まっていた歯車が、また少しずつ動き始めた

「復興」に向けて

陸前高田市内に民家を借り、復興支援活動を続けています。復興支援にはいろいろな形があります。今まで当たり前であった生活の一部を取り戻すことも、その一つだと思います。今、被災地では、住環境やライフラインの整備など「復旧」は進みつつありますが、地域のつながりや思い出の品などはいまだに失われたままです。こうしたものを取り戻せて、初めて「復興」と言えるのではないのでしょうか。
 わたしはこれからも、被災された皆さんと共に一歩ずつ「復興」に向けて歩んで行きたいと思っています。



立教大学教授
 松山 真さん



【10ページ写真】 吉田さんを囲み、思い出話を花を咲かせる生徒たち

【11ページ写真】

(右上) 吉田さんの席には次々と生徒たちが訪れ、再会を喜び合っていました。
(左上) 「被災状況だけでなく、被災する前の美しい故郷の姿も知ってほしい」と、陸前高田市の様子を生徒たちに伝える吉田さん

(右下) 24年前に吉田さんが生徒たちに送った家族の写真が、生徒から再び吉田さんのもとに届けられました。

(左下) 吉田さんが生徒たちに送った手紙



吉田さんと生徒たちの交流の軌跡

昭和61年10月25日

塩尻中学校の文化祭で、全校生徒815人が風船を飛ばす

昭和61年11月2日

飛ばした風船の一つを、吉田さんが東京都内で拾い、文通が始まる

昭和63年10月28日

塩尻中学校の文化祭で初の対面。吉田さんは、塩尻市に2日間滞在し、生徒たちと交流を深める

平成元年3月17日

吉田さんに届いたこの日の手紙を最後に2年4カ月にわたる文通が終わる

⋮

平成23年3月11日

東日本大震災発生

平成24年6月

吉田さんと、復興支援活動をする松山教授が出会う

平成24年8月26日

当時の担任の林先生のもとに松山教授から手紙が届く

平成24年9月14日

林先生と生徒たちが集まり「吉田さんを囲む会」を計画。思い出の品集めが始まる

平成24年11月3日

「吉田さんを囲む会」開催。24年ぶりの再会を果たす

のを、会場の誰もが感じていました。吉田さんは、生徒たちの一言一言にうなずき、「ありがとう」と言葉にしながら、胸に焼き付けていました。

新たな思い出を胸に

「吉田さんに、みんなから渡したいものがあります」。その手に渡されたのは、生徒たちの近況をつづった文集でした。そして、24年前に吉田さんが生徒たちに送った20枚余りの手紙と家族の写真。「取っておいてくれたのか」と、いとおしそうにじっと見つめる吉田さん。「俺の息子、小さい頃はこんな顔していたんだね」。その言葉に、生徒たちは改めて気付かされます。

吉田さんは、自分たちとの思い出だけでなく、自身の、そして家族との思い出の品も、全て失ってしまったことを。

「吉田さん、これからはすてきな思い出をたくさん詰め込んでください」と、差し出された手作りのアルバム。その表紙には「Remitted (再会)」の文字。「みんなのおかげで再会することができました」という、全員の思いが込められた言葉でした。

「皆さんは、わたしの最高の宝物です。本当にありがとうございます」。込み上げる感情を抑えきれずに声を詰まらせる吉田さんを、会場中にあふれる笑顔と拍手が、いつまでも包み込んでいました。

言葉では教えられないこと

初めは「学級活動の一つとして、続けられるだけ続けてみよう」と、文通を始めました。しかし、生徒たちは、手紙を通して吉田さんの情愛や素朴さに触れることで、決して言葉では教えられない、人の温かさや、つながりを感じたのではないのでしょうか。それが、2年4カ月にもわたる文通を可能にしたと思います。そして、吉田さんからもらった大切な心を忘れずに、ずっと持ち続けていたからこそ、今回の行動につながったと信じています。わたしは、こんなにも立派に成長した生徒たちを誇りに思います。



元3年1組担任
林 嘉久夫さん

陸前高田に 吉田さんを 訪ねて

生徒たちとの再会を果たし、かつての思い出と共に、新たな思い出を胸に陸前高田へと帰った吉田さん

今なお震災の爪痕が残るまちで、仮設住宅での生活を送る吉田さんに、この交流がもたらした思いをお聞きしました。



仮設住宅の近くにある展望台に立つ吉田さん。後ろは、今は穏やかな広田湾と、ようやく復興が始まった陸前高田のまち

現地レポート

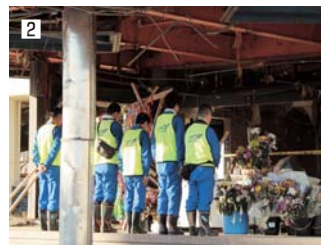
忘れられない光景

陸前高田の市街地に着いたのは、暗闇がすっかり辺りを包み込んだ午後6時。それまでの穏やかな山あいの景色から一変、突如目の前に広がるのは、闇と静寂に閉ざされた世界でした。車のヘッドライトが照らすのは、暗闇へと延びる一筋の道路と、その両脇に広がる一面の更地。カーナビに映るスーパーや銀行のマークが、かつてそこに街があったことを示す唯一の証拠…。言葉が出ませんでした。

震災から1年半。かつての街のにぎわいは、いまだに失われたままでした。



1



2



3

1旧陸前高田市役所庁舎。津波は、建物の屋上付近まで押し寄せました。
2旧市役所庁舎の玄関に設けられた献花台で、黙とうを捧げるボランティアの皆さん。陸前高田では、今も多くのボランティアが活動しています。
3駅前通りから市役所方面に延びる道。かつて、この両脇には店舗や住宅が建ち並んでいました。

津波で失ったものは大きかったけれど、 新しくもらったものは、もっと大きかった

平成24年11月21日、陸前高田市に吉田さんを訪ねました。

自宅に通され、まず目に入ったのは、壁一面に貼られた生徒たちからの思い出の品々。「訪れる人にまず一番に見てもらいたくて」と、吉田さんがうれしそうに言います。「この人は毎晩、手紙やアルバムを読み返しては思い出しているの。そして、仮設住宅のみんなにも見せて、喜びを分かち合っているんです」と、奥さんのチヨ子さんが教えてくれました。

人生の大半が出稼ぎ生活だった吉田さん。家族と会えるのは盆と正月くらい。その中で、2年4カ月にわたる生徒たちとの思い出は「人生で最高の宝物」だと言います。「毎日働いていても、生徒たちのことが頭から離れません。文通を終えた後も、自分の子どもを見るたびに、成長した生徒たちの姿を重ね合わせていました」と吉田さん。心が折れそうになったとき、生徒たちの手紙や写真を

見ては自分を奮い立たせることが何度もあったそうです。

「津波で思い出の全てを失った時、心にぽっかり穴が空いたようでした」。そんな心の穴を少しずつ埋めていくつくれたのは、多くの人たちとの交流から生まれた、新たな思い出であり、つながりでした。「もう二度と会えないと思っていた生徒たちとも再会できて、今でも夢のよう。津波で失ったものは大きかったけれど、新たにもらったものはもっと大きかった。これを機に文通を再開し、生きていく限り皆さんを見守り続けていきたいです」と、吉田さんは笑顔で語ってくれました。

翌日、吉田さんの案内で旧陸前高田市役所を訪れました。震災から時間が止まったかのようにならずむ庁舎。床は、津波で押し流されてきたがれきでいまだに埋め尽くされています。「この庁舎も、もうすぐ取り壊されます。だから見ておいてほしかったんです」日に日に消えつつある震災

の爪痕。だからこそ今、この地に立って、ここで何があったのかを、多くの人に見て感じてほしい。そんな思いが伝わってきました。「わたしたちは、奇跡の一本松と共に強く生きていきます。陸前高田は必ず復興します。その姿を、これからも見守っていてください。そして、元気になった陸前高田を、また見に来てください」。取材の最後に吉田さんはそう語ってくれました。

たとえ遠く離れていても、自分たちを思ってくれる人がいる。つながっている人がいる。そうした絆が明日への希望となる。吉田さんと生徒たちの交流は、人を思う気持ちの大切さを教えてくれました。

仮設住宅の前で奥さんのチヨ子さんと



仮設住宅の前で奥さんのチヨ子さんと

当時、文通をしていた塩尻中学校3年1組の皆さんにインタビュー

吉田さんは、40人にとって特別な存在

中学生当時のわたしたちにとって、吉田さんは、まるで遠くにいるおじいちゃん。みんなの心のどこかにいて、クラスを一つに結び付けてくれる特別な存在でした。

みんなの吉田さんへのそうした思いは、24年経った今でも変わっていませんでした。今回の再会が、1組はいまだに存在し、つながっていることを改めて教えてくれました。11月3日は、クラス40人全員にとっても再会の日であり、新たなつながりを与えてくれた日です。こんな機会に巡り合えたのも、吉田さんがいてくれたからです。

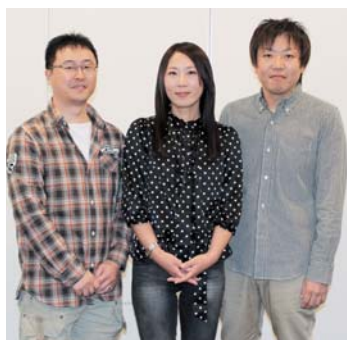
これからはずっとつながってほしい

風船の送り主

白木 知夏さん
(旧姓:川上)



24年前の文化祭で吉田さんからお土産にもらったシャープペンは、今でも大切に持っています。陸前高田の被災を知った時、文通を続けていれば何かできたかもしれないと悔やみました。そんな中で、松山教授から吉田さんの話を聞き、今度こそ何かしなければと思いました。この再会が、少しでも吉田さんの励みになればうれしいです。そして、これからはずっと吉田さんにつながってほしいです。



「吉田さんを囲む会」
実行委員の皆さん

左から
栗倉 巧さん
古幡 由美江さん(旧姓:塚原)
羽場 宏行さん